

江口重幸〔著〕

病いのリアリティ

——臨床民族誌の系譜

A5判上製・金剛出版

2025年4月刊

定価5,280円（税込）

評者＝村澤和多里（札幌学院大学）



著者の江口重幸氏は文化精神医学、医療人類学を専門としてきた精神医学者で、多文化間精神医学会を率いてきた人物でもある。この本はそのような著者の仕事をまとめたものとなる。私はこれまでも著者による論考や翻訳書に多く触れてきたが、そこに貫かれている思想を一望できるのが本書の醍醐味だと感じた。

私が江口氏を知ったのは大学院生のころであった。精神科医療の領域で臨床心理学の研究をしていくなかで、そこに潜む政治性に違和感をもち、精神科医療に対して批判的な考え方にも関心を寄せていた。Laing RDらの反精神医学の運動や、ポストモダン思想の立場から支配的装置としての精神医学を批判したMichel Foucaultの言説は、特に心に響いた。しかし、それらに共感しながら、臨床心理学の研究を続けることに自己矛盾を感じざるを得なくなっていた。

そんなとき、社会学者の知人が紹介してくれたのが江口氏らが訳したArthur Kleinmanの『病の語り』であった。Kleinmanは医学的診断単位である「疾患」と主観的なわずらいの体験である「病い」を区別し、後者を中心にしたケアの思想を説いていた。私はこの本との出会いによって、抑圧的な装置としての精神科医療という見方とは異なった視野を手に入れることができた。私が今も心理臨床の現場に立つことができているのはこの出会いのおかげかもしれない。

本書『病いのリアリティ』では、まず江口氏とKleinmanとの出会い、その医療人類学、臨床民俗誌との関わりについてくわしく書かれている。特に「序編」におかれた、多文化間精神医学会の機関誌『文化とところ』の創刊準備号のために書かれた「ローカルな声を聞く」は渾身の力作ともいえ、著者とKleinmanとの関わりについてまとめられている「クラインマンから学んだいくつかのこと」には、著者の学術的スタンスが明瞭に表されている。

続く、第I部は「文化精神医学と『癒す』ことの系

譜」、第II部は「精神と身体と文化」と題されているが、両部で論じられているテーマは分かち難く結びついている。評者の視点からは、「憑依」と「催眠」をめぐる問題系、精神療法の成立経緯、これらが太い軸となっているように見える。どの論考も読み応えがあるが、第I部の「精神療法の歴史」、第II部の「文化の中に見る解離現象」と「憑依・変身・模倣」は、特にユニークな視点が展開されていて魅力的である。さらに各部の最後を締めくくる「講演」には、「大胆な仮説」も披露され、著者の思想が形式にとらわれないで示されており見逃せない。

著者は、日本における文化精神医学的研究の先駆者として、2022年に亡くなった精神科医の中井久夫にもたびたび言及している。確かに中井の『治療文化論』（岩波書店）や『西欧精神医学背景史』（みすず書房）などは、著者の研究の羅針盤であったのかもしれない。その意味で本書は、著者がKleinmanや中井久夫らという先駆者に導かれながら、知的航海を続けてきた軌跡であるといえるのかもしれない。そしてその軌跡は、後に続く者たちにとっての新たな海図となって、未知の大陸への航路をひらいていくであろう。